

目次

『ペストの記憶』を読むための地図 v

前兆	3	監視人の受難	66
逃げまどう人びと	8	自暴自棄になる人びと	68
逃げるべきか、留まるべきか	12	致命的な徴 <small>しじ</small>	70
感染の拡大	18	さすらい三人衆(前置き)	72
不吉なうわさ	24	巨大な穴	74
迷信と幻影	28	死者の埋葬	77
恐怖と信仰	32	神を畏れぬ者たち	80
偽医者と詐欺師の横行	37	疫病と信仰	84
悔い改める人びと	43	家屋閉鎖の弊害	87
医師の働き	45	疫病をもたらす脱走者	89
市当局の対応	47	学ぶべき教訓	92
家屋の閉鎖	59	迫りくる病魔	95
閉鎖の実態(1)	62	命がけの買い物	97
閉鎖の実態(2)	65	市街地に響く悲鳴	100
		モラルの崩壊?	103
		孤独な死	106
		盗みを働く女たち	108
		教会の下働き、ジョン・ヘイワード	111
		気の毒な笛吹きの話	112

お粗末な危機管理	114
仕事を失う人びと	117
回避された暴動	120
死亡週報への疑問	122
路頭に死す	125
さびれる街	126
最悪の日々	127
神への呼びかけ	129
危険な落とし物	131
船頭とその家族	132
船上生活者の群れ	138
川岸への侵入	141
母親たちの受難	146
凄惨で不気味な実話	151
さすらい三人衆(ベストの来襲)	153
さすらい三人衆(話し合う兄弟)	155
さすらい三人衆(出発)	159
さすらい三人衆(暴動のうわさ)	163
さすらい三人衆(一日目の夜)	165

さすらい三人衆(旅の仲間)	167
さすらい三人衆(強気の秘策)	171
さすらい三人衆(強引な説得)	174
さすらい三人衆(エッピングでの野営)	178
さすらい三人衆(町民との対話)	181
さすらい三人衆(町民からの援助)	184
さすらい三人衆(疫病、エッピングに迫る)	186
さすらい三人衆(放浪ふたたび)	188
さすらい三人衆(最後の宿营地)	191
安息を奪われた人びと	192
船上への避難	194
田舎の無慈悲	195
感染者の邪悪な習性?	198
行政府の賢明な対応	200
いやいやながら、調査員に	203
錯乱する感染者	205
病魔に取り憑かれた人びと	209
火事の少なさ	212
抑えられない感染の広がり	213

感染を隠す住民たち	215	移動する疫病	273
より効果的な対策の提案	217	外国貿易の停滞	274
絶望の淵	219	外国でのうわさ	276
死屍累々 <small>ししかるゑいゑ</small>	222	港の状況	279
信仰と和解	224	国内での物資の輸送	281
最悪の時期	226	公共の焚火	284
市民生活とベスト療養所	231	失業者の増大と意外な救済	285
行政の奮闘	235	峠を越える	288
移動する疫病	238	性急すぎる喜び	290
隠れた感染者と「死の息」	245	軽率さの代償	292
神の裁きか、自然現象か	248	災害の爪痕	296
忍び寄る病魔	250	死者を埋葬した墓地とその現在	297
反省と提言	254	帰還者への風当たり	301
風説への反証	256	宗派対立	302
患者による症状の違い	258	職務に身を捧げた人びと	304
医師の困惑	260	あやしい薬	306
潜伏期間の謎を解く	262	予言と風説	309
異臭騒ぎ	267	家屋の浄化	311
貧困と慈善	270	宮廷と海軍	312

ペスト終息 314

訳注 321

訳者解題 349

※原注は各セクションの末尾にまとめた。

ペ
ス
ト
の
記
憶

ペスト流行の年の

記録

1665 年の

最後の

大いなる災厄

に襲われた

ロンドン

における

公的および私的な

もっとも驚くべき

出来事の

報告あるいは覚書

その間ずっとロンドンに留まっていた一市民による未公開の著作。

ロンドン

王立取引所の E・ナット、

ウォリック小路の J・ロバーツ、

テンプルバーの外の A・ドッド、

セント・ジェイムズ通りの J・グレイヴズ

の依頼を受けて印刷。

1722 年

あれは確か、一六六四年の九月はじめのことだった。近所の人たちと寄り集まって雑談していると、こんなうわさを耳にした——ペストがまたオランダに戻ってきたらしい。実はその前年の一六六三年にも、あの国でペストが大流行していた。特にアムステルダムとロッテルダムはひどかった。それでオランダのペストはどこから来るのが話題になり、誰かがイタリヤだと言うと、いやトルコから帰るオランダ商船の荷物に紛れて地中海を渡ってきたのだとか、いやクレタ島からだ、いやキプロス島だとか、いろいろな意見が出た。でもどこから来たかなんてどうでもよかつた。いずれにせよ、あれがまたオランダに来たことに変わりはないのだから。

そのころは新聞みたいにさまざまな事件やうわさを広めるための印刷物がなかつた。つまり、後の時代に見られるように、誰かが事実を好きなように書き換えることもなかつたわけだ。事件やうわさは、外国と連絡をとっている貿易商などの手紙から集められ、あとはただ口から口へ伝えられていた。なのでいまみたいに事件がたちまち国中に拡散することはなかつた。けれども政府には事実が報告されて、あれがこつちに來るのを防ぐための対策会議が何度も開かれたようだ。ただし、すべてが極秘のうちにおこなわれた。それでこのうわさは徐々に絶え、市民の記憶からも消えはじめた。イングランドにいるぼくらには関係なさそうだったし、誤りだったほうがありがたくもあつた。ところが、一六六四年十一月のどん詰まり、いや、十二月のはじめだったろうか、二人の男（フランス人と言われている）がペストで死んだ。場所はロンドンシテイの市街地を囲む壁よりも西にあるロングエイカー通りで、より正確にはこの通りとドルリー小路の交差点の北側だった。二人の死者のいた家は、なんとかして事実を隠そうと努めた。けれども近所からうわさが漏れ広がり、国務

大臣の知るところとなった。念のため調査して真相を確かめようと、二人の内科医と一人の外科医が呼び出され、その家に行つて検死するよう命じられた。検死の結果、死人の身体のどちらにもあの病の徴しごとなる斑点がくつきり現れていたから、二人の死因はペストであるとの見解を医師たちが公にした。それがセント・ジャイルズ教区の事務員に伝えられ、事務員は組合本部に報告を出した。するとその週の死亡報告書には、いつもの書式でこう印刷された。

ペスト 2 感染教区 1

不安が人びとのあいだから巻き起こり、市中どこでも警戒しはじめた。恐怖はさらに募つた。一六六四年十二月の最後の週、同じ家で、同じ病気で、もう一人の男が死んだからだ。それから六週間は平穩な日が戻つた。感染を疑わせる死者が出なかつたので、病魔は去つたとうわさされた。だがそれから、あれは二月十二日くらいだったか、別の家でもう一人死んだ。同じ教区で、同じ死に方だった。

ロンドン市民の目がこの街はずれをじつと見守るようになった。毎週の死亡報告によると、セント・ジャイルズ教区では死者が異常に増えていた。街はずれの人ごみにはペストがうようよしている、ほんとうはペストでたくさん死んでいるのに、なるべく一般人に知られないよう情報が隠されているのだ、という疑いが生まれていた。みんなが不安にとり憑かれて、ドルリー小路など疑わしい通りは、どうしても行かなければならない大事な用でもないかぎり、まず誰も足を踏み入れなかつた。

死亡報告の増え方を見てみよう。セント・ジャイルズ・イン・ザ・フィールズ教会の管区(すなわちセント・ジャイルズ教区)と、その東となり、ハウボンのセント・アンドルー教会の管区(あるいはハウボン教区)で一週間に死ぬ人の数は、普通はどちらとも一二名から一七名、せいぜい一九名といったところだった。ところがセン

ト・ジャイルズ教区でペストが発生したときから、ありふれた死因で亡くなったとされる人の数がすさまじく増えていた。たとえば――

	セント・ジャイルズ	セント・アンドルー
12月27日～1月3日	16	17
1月3日～10日	12	25
1月10日～17日	18	18
1月17日～24日	23	16
1月24日～31日	24	15
1月31日～2月7日	21	23
2月7日～14日	24 ^{**}	

(※うち1名の死因はペスト)

これと似た死者の増加は、ホウボン教区の南側と接するフリート街のセント・ブライズ教会の管区でも、逆にその北側と接するクラークンウエルのセント・ジェイムズ教会の管区でも見られた。どちらの教区でも毎週亡くなる数は四名から六名、あるいは八名だったが、当時はこれだけ増加した。

12月20日～27日	0	セント・ブライズ	8	セント・ジェイムズ
12月27日～1月3日	6		9	
1月3日～10日	11		7	
1月10日～17日	12		9	
1月17日～24日	9		15	
1月24日～31日	8		12	
1月31日～2月7日	13		5	
2月7日～14日	12		6	

しかもこの時期は、例年だと報告内容があまり悪くないはずなのに、毎週の死亡報告がどこでも増えているので、市民は大いに不安に駆られた。

一週分の死亡報告に載るロンドン全体の死者の数は、いつも二四〇名ほどで、多くても三〇〇名だった。この三〇〇でも、とても高い数値だと見られていた。ところがペスト発生のもと、死亡報告はずっと増え続けた。

死者／増加

12月20日	～	27日	291	／	
12月27日	～	1月3日	349	／	58
1月3日	～	10日	394	／	45
1月10日	～	17日	415	／	21
1月17日	～	24日	474	／	59

最後の週の数值など本当に恐ろしいもので、前回の大流行があった一六五六年からそれまで、こんなに大勢の死者が一週間で出た記録はなかった。

しかしこの騒ぎもまた鎮まった。その年の冬は気温が低く、十二月にはじまった凍えるような寒さは、二月の終わりごろでもかなり厳しく、そこに激しくはないけれど身を切るような風が吹きつけていた。すると死亡報告の数が減ったので、ロンドンの街は健康になり、危険は去ったみたいなのだ、と誰もが思いはじめた。ただ、セント・ジャイルズ教区の死者の数は多いままだった。特に四月のはじめからは毎週二五名で変わらず、十八日から二十五日までの週になると、セント・ジャイルズ教区で埋葬された者は三〇名に増え、うちペストによるものが二名、発疹チフスによるものが八名だった。ただ、この発疹チフスは実はペストだと思われていた。並行してロンドン全体でも「発疹チフス」による死者の数は増え、この前の週は八名、いま話した週は一二名だった。

これでまた、ぼくらはみんな警戒した。巷ちまたにはおぞましい不安が渦まきはじめた。いまや気候が変わって

暖かさを増し、夏もそこまで迫っていた。でも翌週にはまた少し希望が見えた。死亡報告が減り、全体での死者の数はたった三三八名、うちペストの死者はなく、発疹チフスの死者も四名だけだった。

逃げまどう人びと

ところが次の週になると元に戻り、病魔は他の二、三の教区にも広がった。ハウボンのセント・アンドルー教区、その南西のセント・クレメント・デインズ教区、さらに市民を恐怖に陥れたのが、市街地の壁の内側で一名死んだことだった。セント・メアリ・ウールチャーチ教会の管区、よりくわしくは、株式市場近くのベアバインダー小路である。ロンドン全体でペストの死者九名、発疹チフスの死者六名だった。調査したところ、ベアバインダー小路で亡くなったのはフランス人で、ロングエイカー通りの感染者の出た家の近所に住んでいたが、病魔を恐れて引越していた。ところが自分もすでに感染していたのに気づいていなかったのだ。

五月のはじめだったが、気候は穏やかで、寒暖の変化はあるけれどまだ涼しく、市民は希望を失わなかった。強気になれたのは市街地が健康だったからだ。全部で九七ある教区で死者の数は五四だけなので、あれはもっぱら街はずれの連中がかかっている、もう広がらないんじゃないか、と思うようになった。翌週、つまり五月九日から十六日にはさらに望みが出てきた。ペストの死者は三人のみで、しかも市街地とその周囲の特別行政区には一人もいなかった。セント・アンドルー教区の死者はたった一五名で、とても低い数値だった。確かにセント・ジャイルズ教区では三二名が死んだけれど、ペストの死者は一名だけだったから、みんな安心しはじめた。全体の死亡報告の値もかなり低く、一週前は三四七名に止まり、いま話した週もたった

訳者解題——武田将明

取り憑かれた著作

本書は、一六六五年にロンドンを襲ったペストの被害について、『ロビンソン・クルーソー』（一七一九年）の著者として有名なダニエル・デフォーが、架空の語り手を用いて記録した作品である。一六六五年のペストは、イギリス社会に大きなショックをあたえた事件であり、同時代から現代に至るまで、数多くの書物が出版されている。もしもこの災害に関する客観的な記録を求めるのであれば、宮崎揚弘『ペストの歴史』の第九章や、A・ロイド・ムートとドロシー・C・ムート(A. Lloyd Moore and Dorothy C. Moore)の『疫病大流行』などを参照すべきだし、同時代の資料であれば、本書でもしばしば引用されている「死亡週報」(“the Bill of Morality”)や、デフォーも参照したナサニエル・ホッジズによる『ペスト論』(Leimologia、ラテン語の原著一六七二年、英訳一七二〇年)のほか、サミュエル・ピープス(Samuel Pepys)やウィリアム・ボグハースト(William Boghurst)といった人びとによる記録も残っている。しかし、こうした著作のどれも、本書『ペストの記憶』のように読まれていない。つまり、歴史上の資料という役割を超えて、多くの読者の心を揺さぶるような価値を認められてはいない。

現代の観点から見れば、それは当たり前かもしれない。あの『ロビンソン・クルーソー』の著者が、疫病流行という大事件を描いた作品となれば、優れた文学作品に違いないと思いたくなるし、ひよっとしたら、

書店でこの解説を読み始めたあなたもそのひとりかもしれない。では果たして、『ペストの記憶』の普遍的な価値は、その高度な文学性にあるのか。これは単純に答えられる問いではない。始めの数ページを読めば分かるように、本書は小説というより事実の記録、あるいはルポルタージュに近い。同様の構成をもつ文学作品に、アルベール・カミュの『ペスト』（一九四七年）があるが、この二十世紀の古典は、同時代のアルジェリアにおける疫病の記録という文体を取りながらも、医師のリウーや高等遊民のタルーなど個性のある登場人物を配しつつ、巧みに複数の物語を織り込んでいる。どれだけ事実らしく見えても、カミュの『ペスト』が緻密に構成されたフィクションであることを疑う人はいないだろう。

それと比べると、デフォーの『ペストの記憶』は乱雑にも思える。本書には、印象的な「キャラ」こそ何人も出てくる。教会の下働きのジョン・ヘイワード、狂信者ソロモン・イーグル、死体と間違えられた笛吹き男、そしてペストの猛威を逃れ、安住の地を求めて旅する「さすらい三人衆」など。しかし、彼らはいずれもペストの渦中にあるロンドンとその周辺を描出するための素材に止まり、自分の出番が終われば舞台を去ってしまう。ただひとり一貫して登場する、語り手のH・Fにしても、『ロビンソン・クルーソー』の主人公のような個性をあたえられていない。作中で彼は名乗ることさえ許されず、最後にようやく拙い自作の詩の作者として、イニシアルが記されるのみだ。

筋の展開にしても、時系列に沿ってはいるが、事前の構想があつて書かれたものには思えない。本書でもっとも頻出する表現は、「これは後で述べる」と「すでに話したとおり」だろう。このうち前者については、どこで続きが述べられたのか最後まで分からないこともあるし、「さすらい三人衆」の場合のように、予告から本篇まで八十ページも開くこともある。後者についても、事前の意図があつたというより、ある種の強迫観念に駆られて、家屋の閉鎖など特定の問題を繰り返し検討している印象が強い。良くも悪くも即興性の高い

語り方なので、ときには文章が途中で放り出され、無理やり別の文とつながっていたり、代名詞がなにを受けているのか不明瞭なこともある。つまり、この作品に特有の性急さのために、芸術的な完成度がいくらか犠牲にされたように思えるのだ。なぜ、デフォーはこれほど急いでいたのか。

ひとつ指摘すべきは、一七二〇年から二二年にかけて、マルセイユなどフランスのプロヴァンス地方でペストの大流行があり、本書の刊行された一七二二年には、ロンドンにも累が及ぶ危険性があつたことだ。なお、これはヨーロッパにおける最後のペスト流行だが、ロンドンには上陸しなかつた。本書の扱っている一六六五年の大流行以降、ロンドンはペストの被害を免れている。話を戻すと、一七二〇年以降、大陸でのペスト流行に怯えるロンドン市民の心境を反映するかのように、ペストに関する著作が次々と世に現れた。二〇年には、ホッジズの『ペスト論』の英訳のほか、こちらも高名な医師のリチャード・ミードによる『ペスト感染に関する小論』(Richard Mead, *A Short Discourse concerning Pestilential Contagion*)も刊行されている。また、一七二〇年から二二年にかけて、ペストを題材にした聖職者による説教が十九種類も出版された。デフォー自身、本書の前に、『ペストへのしかるべき備え』(*Due Preparation for the Plague*, 一七二二年)という指南書を出している。『ペストの記憶』は、こうした時勢に対応した著作だった。

もうひとつ重要なのが、本書の刊行された一七二二年における、作者デフォーの異常ともいえる執筆欲である。「奇蹟の年」とも言われるこの一年に、彼は『モル・フランダース』(*Moll Flanders*)、本書『ペストの記憶』、『ジャック大佐』(*Colonel Jacque*)とさう二つの長篇小説を上梓し、それ以外に先述の『ペストへのしかるべき備え』と、『信仰にもとづいた求愛』(*Religious Courtship*)とさう^{コングラトゥレーション}道徳指南書も出版している。しかも、一月に『モル・フランダース』、二月に『ペストへのしかるべき備え』と『信仰に基づいた求愛』の二冊、そして三月に本書と、とても常識では考えられないスピードで著作を発表しているのだ。もちろん、マ

ルセイユでペストが発生した一七二〇年から、本書は準備されていたのかもしれないが、他に多くの著作を出している点からみても、この時期のデフォーは、いわば書くことに取り憑かれていたらしい。

つまり、みなぎる筆力を自覚する作家が、いま書かねばならないという強い思いで、構想を練り上げる暇も惜しんで没頭したのが本書である。ただし、これだけでは、なぜ本書が時代を超えて多くの読者に訴えるのかを説明できない。物語や人物造形の工夫とは異なる魅力があるとすれば、それはなにか。

真の語り手は誰か？

まず、先述のような語り口だからこそ、表現できることがあるのに注目したい。特定の問題が途中で放り出されたかと思うと、意外なところで呼び戻され、それが繰り返されるうち、読者も語り手とともに悩むようになる。それはまるで、幾度かの潜伏期間を経て、次第にロンドンの町を侵略したペストの不可解さ、不気味さを反復するかのようだ。また、この巨大都市の西の外れで猛威をふるったペストが、徐々にその活動地域を東に移したのと同じように、本書でも地域ごとに印象的な人物や逸話が次々と思いついては消えていく。実は語り手のH・Fでさえも、退場への予告が本書のなかで記されている。すなわち、「この記録の著者」が、本書刊行時には、他でもないペストによる死者の埋葬地に眠っていることが、「原注」として示されているのだ(二九九ページ)。H・Fのような、ペスト禍を生き延び、その記録を残した(と本書で設定される)者も、結局死を免れず、この世界を超越などできない。本書はそれを簡潔に、また冷徹に告げるのみである。

だから、作者デフォーがどこまで意識していたかは分からないが、H・Fという匿名の存在の奥にいる、本書の真の語り手はペストそのものだ、という見方も成り立つだろう。H・Fは、自分がペストに感染しな

かったのは神の思し召しだ、とありがたがっているが、実は彼を選んだのはむしろ病魔の方かもしれない。少なくとも、ペストを扱った他のフィクション・ノンフィクションのどれも、本書のような不穏さを行間に湛えてはいないのである。

そうなると、何度も繰り返される「これは後で述べる」と「すでに話したとおり」は、語り手／作者の手を離れて暴走しそうになる物語を秩序立てようとする、必死の抵抗の痕跡かもしれない。さらに言えば、異常な執筆欲に駆られたこの時期のデフォーにとって、書くことは、いわば猛烈と溢れ出す言葉を理解可能な文章に封じ込める作業だったのかもしれない。執筆欲に取り憑かれた作者と、疫病に魅入られたロンドンとの奇蹟的な一致によって本書が生まれた、というのはさすがに穿ちすぎだろうか。

生権力の露呈

いづれにせよ、本書の隅々まで、溢れ出すものと制御するものとが緊迫したせめぎ合いを演じているのは間違いない。ただ、ここで気をつけるべきは、この対立を安易にペスト(外的な暴力)と市民(内的な秩序)との闘争として解釈してはいけないことだ。むしろ本書の醍醐味は、ペストという圧倒的な暴力を囲いこみ、封じこめようと努める市の行政が、市民を保護する側面と抑圧する側面を合わせ持つという、秩序の両義性にこそ認められる。市民の自由を制御せずに、ペストを管理することはできないのだ。

本書の語り手は、決して行政の管理に反対するわけではない。むしろ、市長ロドリック・メイヤーをはじめ行政官の努力をしばしば賞讃している。本書における行政とは、決して専制君主のように振る舞うものではない。実際、国王や首相といった国家権力はほとんど登場しない(史実では、ペスト対策に当たった貴族もいたが、それは無視されている)。ペストの発生後、早々にオックスフォードに避難した宮廷の無責任と無能ぶりに対し、口

ロンドン市の行政の良心と有能さが強調される。ロンドン、とりわけその中心をなす市街地シティでは、都市の繁栄を担う中産市民が自治をおこなっていた。デフォー自身自身の父も、ロンドンで商人として成功し、自由市民フリーマンの地位をあたえられ、市街地の自治に関わっていた。ゆえに、本書における権力とは、無辜むこの民を虐あげて奢しるにふける暴君ではなく、町の秩序を守ろうと精励する市民の代表者である。

この点に注目して、ペストが猖獗しょうけつを極めるさなかにあつても助け合い、町の秩序を保ったロンドン市民の人間愛と勤勉さを讃える物語として、本書を読んだ研究者もいる(後出の文献表の *Lowak* と *Schonthorn* など)。しかし、すでに示唆したとおり、こうした読みは本書における秩序の両義性を見落としてゐる。市民による、市民のための統治は、ペストという外敵からロンドン全体を守るためならば、何者かを犠牲にすることを決して厭わぬ。さらには、統治に疑問を抱かせるような、不都合なものは徹底して隠蔽する。

たとえば、本書で執拗に言及される、家屋閉鎖の問題。ある家で、一人でもペスト患者が出たら、その家の主人から召使いまで全員がそのまま閉じ込められ、一步も外に出られないというのは、当事者からすれば理不尽極まりない。本書の語り手も、概して家屋閉鎖に批判的だが、同時に患者を隔離する措置の必要性は認めている。それだけでなく、ごねて期間限定にでもらつたとはいえ、家屋閉鎖を管轄する調査員の仕事を引き受けている(本書二〇五ページ)。このように、支配と被支配のあいだを揺れ動く H・F の視点は、市民が市民を管理・監視することの問題点を暴きつつも、事態を権力と民衆の対立という枠に収めることも拒否する。その代わり、本書は一方で「さすらい三人衆」など、閉鎖と抑圧をかくぐつて生き延びる者のたくましさを描きつつ、他方で市街地を徘徊する病人の恐怖を描出することも忘れない(二〇六ページなど)。

自治・管理をめぐる、このような両義性は、行政によるもう一つの重要な施策、すなわち遺体の埋葬にもみることが出来る。ロンドン市当局は、ペストによる死者を夜間にすつかり回収し、日中の通りに遺体が放

置されていることはなかった、と語り手は指摘する。家屋閉鎖のときと異なり、ここでは行政の有能さが無条件で褒められているように思える。しかし同時に、本書を通じてもっとも印象的な場面の一つは、死者を大量に放り込むために掘られた巨大な穴を、語り手が訪問する箇所(七四ページ)ではないだろうか。ここを読めば、日中の整然とした市街地の陰に、遺体を物として投棄する酷薄な能率主義があることを痛感させられるはずだ。

こうして明らかとなるのは、表面的な秩序を維持するために市民の身体を家庭のなかまで管理し、秩序を逸脱する存在(病人・死体)を徹底して排除するという、近代的な権力のあり方だ。この権力は、市民の生命を護ると言いながら、「穀潰し」(二五五ページ)と呼ばれる貧民たちにもっとも危険な仕事を割り当て、その生命を犠牲にすることは厭わない。ミシェル・フーコーのいう生権力が、ここでは剥き出しにされている。なお、フーコーの権力論を『ペストの記憶』など十八世紀の作品に応用したジョン・ベンダー(John Bender)の『刑務所を想像する』や、デフォーの描く都市空間のアンビヴァレンスを指摘するシンシア・ウォール(Cynthia Wall)の『王政復古期ロンドンの文学的・文化的空間』といった研究書は、本書における権力の機能を理解する上で役に立つだろう。

そしてこの、ペストという危機を背景に、近代市民社会の根本を抉り出した点にこそ、本書が現代人に強く訴える秘密がある。単にペストの被害を記録し、その悲惨さを訴えるだけであれば、『ペストの記憶』以前にも、ヨーロッパ各国で多数の著作があった。イギリスであれば、過去にトマス・デッカーの『驚異の年』(Thomas Decker, *The Wonderful Year*, 一六〇三年)があり、フランスでも、ジャン＝バプティスト・ベルトランの『マルセイユのペスト年代記』(Jean-Baptiste Bertrand, *Relation historique de la peste de Marseille*, 一七二一年)が、本書の一年前に刊行されていた(ベルトランについては、文献表のゴードン(Gordon)の論文を参照)。

他にも、古代からルネサンスまで、さらにはイスラム世界でのペストに関する記述が、村上陽一郎『ペスト大流行』で紹介されている。しかし、これらの文書のどれも、いや、カミュの『ペスト』でさえも、市民社会が危機に瀕したときの行政と市民のふるまいを、本書のように生々しく描けてはいない。

とりわけ現代日本に住む人びとにとって、本書が三百年前のイギリスで書かれたことは、にわかには信じられないのではないか。行政府が毎週公表する死者の数に一喜一憂し、さらにはその数値を疑う市民たち。突然大量に現れた自称専門家たちの説く、真偽の定かでない対策。さつさと被災地を後にする人と、あえてそこに留まる人。さらには、避難者を忌避する自治体や、後日被災地に戻った避難者を排除する残留者。風評による経済被害。これらは、二〇一一年三月一日に発生した地震と津波、そして原発事故のあと、私たちが見てきた光景の一部と重なる。ただし、勘違いしないでほしいのは、本書がはるか三百年後の原発事故を予見していたからすごいのではない、ということだ。そうではなく、一七二二年という、まだ世界が近代に入り始めたばかりの時期、アメリカ独立もフランス革命も経験していなかった時代に、すでに市民が市民を管理するという自律的な権力の抱え得る問題を理解し、ペストという壊滅的な危機を媒介にして、その光と闇を描き切った点にこそ、本書の普遍的な価値があるのだ。

危険と文筆——デフォアの生涯

ここからは、必要なことをいくつか補足したい。まず、作者デフォアの人生については、本書の訳者による『ロビンソン・クルーソー』の翻訳(河出文庫、二〇一一年)に付された解説で手短にまとめられている。より詳しく知りたければ、塩谷清人『ダニエル・デフォアの世界』(世界思想社、二〇一一年)を繙くとよい。とはいえ、本書に関連することだけを列挙しておこう。